

# 乳児は歌をどのようにうたい始めるか —音楽的刺激に対する身体反応—

細田 淳子

(平成 14 年 10 月 3 日受理)

## How Do Infants Begin to Sing —Infants' Physical Reaction to Musical Stimuli—

HOSODA, Junko

(Received on October 3, 2002)

キーワード：乳児, 揺れる, 音楽的刺激, 身体反応

Key words: Infant, Sway, Musical Stimulus, Physical Reaction

### 1. はじめに

乳児期における言葉の獲得に関する研究は多い。クーイングとよばれる喃語の発生に始まり、その喃語がはっきりとした発音になり、初語から二語文三語文と成長に連れて発達していく様子は多くの言語研究者や心理学者により明らかにされている。

しかしながら歌の方は、同じ音声による表現であるにもかかわらず、抑揚のある声の表現がどのようにして歌であると認識できるものになっていくのか、という点など不明なことが多い。そこで歌の獲得に至る発達の過程を明らかにしたいと考え、4年間にわたり乳児の声や身体表現の様子を継続して観察してきた。

細田(2001 本学研究紀要第41集)では乳児のうたい始める時期に着目し、ことばを話し始める時期との比較を試みた。

歌の獲得について理解するためには、生後からうたい始めるまでの間の様子をより詳しく観察する必要がある。そしてうたい始めるまでの過程には、声による表現ばかりではなく、その他の身体による表現や表情や行動のすべてが総合的に含まれている。そこでそれに続く研究として、細田(2002a 同42集)では、ことばを話し始め歌をうたい始める前から身体で音楽に反応している乳児の自由な表現に視点をあてた。

本論は以上の研究に続くものである。

### 2. 研究の目的

歌をうたい始める前の乳児が音楽的な刺激に対して、喜んで手足を動かすといった反応をすることはよく知られている。しかしながら、どのくらいの発達段階で身体のだの部分をどのように使って表現をしているか、といった詳しい発達の過程は明らかであるとは言い難い。そこで今回はそのような身体表現を、保育施設における乳児の日常生活の中から見つけ出し、詳細を明らかにすることを目的とする。

### 3. 研究の方法

これまでと同様に本学ナースリールームでの観察及び、保育士たちからの聞き取り調査などを中心に考察する。実験的にうたって聞かせたりCDをかけたりということは一切せずに、日常の保育の中から丹念に子どもの表現を拾う。また筆者は観察者であることに徹して子どもに直接働き掛けを行わず、ビデオとカメラで記録をとる。観察は2001年4月から2002年4月の間に行った。対象児は0歳から1歳児クラスの男児4名女児2名である。詳細は表1の通りである。

### 4. 音楽的刺激に対する身体反応

音楽的な刺激に対して、乳幼児はそれぞれの身体的発達段階において、身体の出るところを全て使って表現している。例えばベッドで仰向けに寝ている子どもは歌声のする方や音のする方を見たり、足をバタバタさせる。

表1 研究対象児の詳細

対象児	生年月日	入室年齢	歩行開始	言葉の始め	うたの始め	まわる
T児（男）	1999,7/21	8ヶ月	15ヶ月	15ヶ月	15ヶ月	16ヶ月
Y児（男）	1999,12/25	3ヶ月	12ヶ月	16ヶ月	17ヶ月	14ヶ月
I児（男）	2000,2/10	3ヶ月	11ヶ月	16ヶ月	21ヶ月	17ヶ月
S児（男）	2000,6/2	10ヶ月	12ヶ月	16ヶ月	24ヶ月	15ヶ月
U児（女）	2000,6/5	10ヶ月	11ヶ月	14ヶ月	16ヶ月	----
K児（女）	2000,9/23	6ヶ月	11ヶ月	17ヶ月	20ヶ月	----

腹ばいで寝ている子どもは、そのままお尻を持ち上げてリズムカルに動く。座れるようになると両手をパチパチ叩くように合わせたり、身体を前後に揺らしたりする。膝立ちができるようになると、膝立ちのままで身体を揺らす。その膝立ちが長い時間うまくバランスをとってられない時には、腹ばいになってクルクルまわって楽しさを全身で表現する、という事例もある。抱まり立ちの出来る場合は手はふさがっているので、足を屈伸させてリズムをとる。立つことのできる子はその場で膝の曲げ伸ばしをしたり、上半身を揺らし、歩くことのできる子どもは両手を上げて踊る、などである。

それぞれの様子を下記の具体的な事例から考察していきたい。

#### 4-1 動きの分類

観察の結果、音楽的な刺激に対する身体の反応はさまざまあるが、主な身体表現を次の6つのカテゴリーに分類することができた。ここではベットで寝ている間の動きは省いている。生後半年くらいして座ることができるようになった後の発達段階における表現に限って分類を行った。以後カテゴリーをCで表す。

- C 1 身体を上下に揺らす。立位の場合は膝を屈伸させる。
- C 2 身体を前後に揺らす。
- C 3 身体を左右に揺らす。
- C 4 その場で足踏みをする。足を踏み変えて重心移動するものも含む。
- C 5 その場でクルクルまわる。
- C 6 その他の表現。

6名の対象児それぞれの観察記録やVTR録画記録の中から、上記カテゴリーにあてはまる事例を選び出した。記録の中には数多く同じカテゴリーの表現が含まれてい

るが、その中で月齢の一番低い、早期に出現した事例を選び出した。

#### 4-2 事例

##### ① T男児

- ・保育者の歌声にすぐ反応し、座位のまま上下に揺れてリズムをとる。8ヶ月—C 1
- ・アニメの歌が聞こえてきたら座位のまま身体を前後に揺らしてリズムをとる。12ヶ月—C 2
- ・保育者が両手を取り歌をうたいながら身体を揺らすと、足を高く交互に上げリズムカルに足踏みする。14ヶ月—C 4
- ・歩きながらその場でクルクルまわる。16ヶ月—C 5

- ・立った姿勢で顎を前につき出して頭を振り、同時に全身を上下に曲の速さに同期させリズムカルに揺らす独特の形になる。16ヶ月—C 1

##### ② Y男児

- ・保育者の膝につかまり立ちし、リズムカルに揺れてる。8ヶ月—C 1
- ・CDから「タコヤキマンボ」という曲が聞こえてくると、膝立ちで左右に大きく揺れていたが、そのあと腹ばいになって風車のようにクルクル5～6周まわる。9ヶ月—C 3, C 5
- ・保育者が歌うと正座したまま、左右に揺れる。頭も左右に揺らし、続けて膝立ちになって上下動に変わり、ピョンピョン飛び跳ねる。11ヶ月—C 3, C 1, C 6
- ・母親の歌に合わせて膝を上下させたり、足踏みしてリズムをとる。14ヶ月—C 1, C 4
- ・立ち止まり、片足を軸にクルクルまわる。目がまわって転ぶと声をたてて笑う。14ヶ月—C 5
- ・一定の場所でクルクルまわり、目がまわってよろよろ



<写真1> 上下に揺れて楽しさを表わす女児13ヶ月

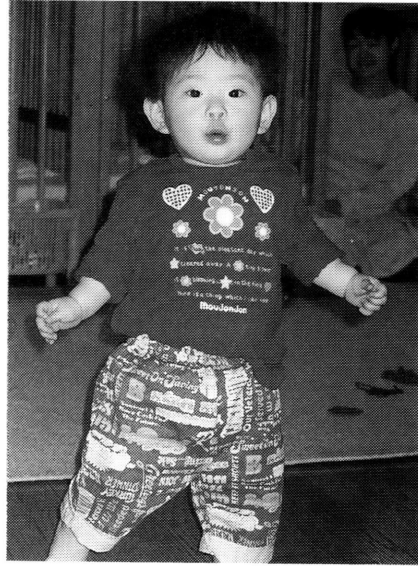
- するのを楽しむ。 15ヶ月—C 5
- ・「雨があがったよ～」とうたうと手をグーパーグーパーさせてリズムをとる。 17ヶ月—C 6

#### ③ I男児

- ・箱型乳母車で散歩中に掴まり立ちしながら、保育者がうたうとリズムカルにピョンピョン膝を曲げ伸ばしして跳ねる。 9ヶ月—C 1
- ・つま先歩きや、後ろ向き歩きをする。 16ヶ月—C 6
- ・ミニカーを片手に持ち、つま先立ちで跳ねながらクルクルまわる。 17ヶ月—C 5

#### ④ S男児

- ・母親に支えられて掴まり立ちし、上下屈伸を楽しむ。 10ヶ月—C 1
- ・保育者が他の子どもに子守歌をうたっていると、ラックに座って食事中であるのに、身体を左右に揺らして曲にのっている。 12ヶ月—C 3
- ・保育者の歌が聞こえると、身体を左右に揺らして満面の笑みを浮かべる。正座していたので、左右に大きくたくさん揺れても倒れないように手を床に左右交互についてバランスをとる。 17ヶ月—C 3
- ・保育者の歌を聞きながらバタバタと足踏みして、ここにこしている。(これは前後や左右に揺れる以外の初めての表現であったので驚いたが、後日NHKテレビの子ども番組の振り付けのまねであることが判明した。) 17ヶ月—C 4



<写真2> 歌に合わせて左右に揺れるU女児13ヶ月

- ・CDによる「エリーゼの為に」が聞こえてきた時に、他の曲では行ったことのない両手を指揮者のように振る動作をする。足踏みも左右に身体を揺らすことも行い、全身でこのピアノ曲を楽しんでいる。 18ヶ月—C 6

- ・保育者が「やぎさんゆうびん」の歌をゆったりと他児と絵本を読みながらうたっていると、S男児は別の絵本を自分の足の上に乗せたままニコニコして左右に揺れる。 22ヶ月—C 3

#### ⑤U女児

- ・おもちゃをしゃぶりながら掴まり立ち、上下の屈伸運動を楽しむ。 10ヶ月—C 1
- ・歌に合わせて左右に揺れて声を出す。 13ヶ月—C 3

#### <写真2>

- ・乳児室でピアノ曲のCD「エリーゼの為に」をかけた後、うつ伏せに寝そべて両手を頬の下に重ねて寝るポーズをとった。おむつを替える台の上で替えている時にもう一度曲が流れると、狭い台の上にもかかわず、上向き状態から横向きに寝返って両手を頬の下に重ねた。しかし他の子どもの歌やアニメソングでは同様の表現は全く出ない。 18ヶ月—C 6
- ・歌に合わせて両足を揃えてピョンピョン飛ぶ。 22ヶ月—C 6

#### ⑥K女児

- ・両手を左右に大きく開き、足も開いた大の字の状態

左右に大きく揺れて体重を完全に片足ずつに移動する。

15ヶ月—C 3

・CDで童謡をかけると、身体や頭を左右に振ってゆったりとしたリズムをとる。

16ヶ月—C 3

・保育者がうたう時は、いつもは身体を左右に揺らしていたが、元気のよい歌をうたうと足踏みをする。

17ヶ月—C 4

#### 4—3 考察

以上のさまざまな身体の動きは、一緒にうたいたいが、まだうたえない子どもたち、あるいは音楽やリズムを聞いて嬉しさを感じた子どもたちの精一杯の音楽表現である。子どもは、ある日突然にうたい出すのではなく、歌を聞き、リズムを感じる「溜込みの時期」があるだろうと予想していた。しかし、これほど個性豊かに全身を使いたい始める準備をしていたとは驚きである。

どの子どもでも同じような表現をすることがある一方、子どもによってそれぞれ独特の表現をすることもある。保育者の歌声という同じ刺激に対しても子どもによって、身体を左右に揺らすことが好きな子どももいれば、上下動の屈伸の方が好きな子どももいるようである。

これは子どもの性格や担当保育者の良くうたう歌の種類、または保育者のうたい方が元氣よく活動的か、静かにゆったりしているか、などによってそれぞれの表現が生まれているようである。また上下の動きはゆっくりの場合も速く激しい時もあるが、横揺れは、ゆったりとした穏やかな表現がみられた。

獲得できた表現の順序は、立位がとれるようになった以降に限った場合、次の順序性がみられた。初めころは上下屈伸が多く見られ、その後頭や身体を前後に揺らす様子、続いて左右に揺れる動きが現れた。この順序は2本の足でバランスをとって立てるようになった子どもにとって、安定性の高い順番であると言えることができるだろう。一概に同一視はできないが、障害児教育で行われている感覚統合の実践方法も花熊（1997）によれば、上下、前後、左右という安定性の高い順に刺激を与えていくのだという。

子どもは、保育者がうたっている時にはその様子をじっと見ている。だから保育者が左右に身体を揺らしながらうたった場合は、子どもも模倣して一緒に左右に揺れることがある。しかしながら子どもの動きを見ていると、模倣ではなく子どもの中から生まれた自然な表現であるとしか解釈できない場面の方が多い。

特に5番目のカテゴリーのクルクルまわる表現などは、保育者はまわって見せたりすることは日常生活の中ではほとんどないため、子どもの中から自然に生まれた嬉しさの表現と考えられる。何かのきっかけでまわりはじめ、そうすると今度はまわることが楽しくてしかたないというような様子である。

クルクルまわる様子は、揺れる動きとはいささか異なるが、観察児4人において歩行開始後の1ヶ月から6ヶ月の間に観察できた。それは2本の足で身体を支え、うまくバランスをとれるようになった時期と一致する。犬などの動物も嬉しい時にクルクルまわる様子はよく見かける。人も本能的に喜びを表す時にクルクルまわるのだろうか。

カテゴリー6のその他の表現の例として、U女児のピアノ曲を聞くと横向きに寝る姿勢をとる様子を挙げた。身体表現と呼ぶにはあまりにも動きのないものであるが、U女児の寝そべる様子は感受性の人一倍強いU女児が全身でリラックスしたい、との表現をしたのだと考えられる。

#### 5. リズムの同期

胎児のころから始まる足蹴りの動きを始めとして乳児の動きにはリズムがある。この理由を梅本（1999a）は「幼児の反応は必ず数回、それも同じパターンで反復して起こるからそこにリズムを感じるのだ」と述べている。今回の観察でY男児の事例では、保育者のうたう歌のテンポにY男児の身体の揺れのテンポが合っている。これは14ヶ月のY男児が自分に固有のテンポを外界からの刺激つまり歌のテンポに同期させようとしたから合ったのであり、驚くべき能力であるといえよう。この事例の場合、膝の屈伸から次の屈伸までの時間間隔を自由に变化させる事ができているから同期できたのである。拍を刻みテンポを合わせることは、同期の基本的な能力である。

音楽心理学等の分野ではさまざまな同期反応の実験が行われている。例えば梅本（1999b）が紹介している実験は、「テープレコーダーから聞こえてきた音にあわせてこれを叩いてごらん」と言ってタッピングさせるものである。結果は「2歳児5名の中で同期できたものは1名もなく、3歳児ではじめて同期できるようになる。」というものであった。その理由として2歳児では「一緒に叩く」という意味が理解できない子が5名中3名いたことを挙げている。梅本（1999c）自身「実験状況は日常

の状況から切り放して特定の反応に焦点をあてたものであり、そこでみられる行動は不自然な状況での乳児の行動であることは否定できない。」と述べている。

今回、実験室での実験結果である3歳児よりも月齢の低い14ヶ月の乳児が同期することが確認できた。このことの意味は大きいと考える。なぜならば、乳児の欲求や心の動きが成長発達を促していることの証しであると言えるからである。つまり、日々の生活の場において信頼関係のある保育者と乳児との間で、乳児側に「一緒にうたいたい、合わせたい。」という欲求があるからこそ同期できたのであると筆者は考える。そうであるならば、子どもの音楽的発達において動機的重要性があらためて確認できたことになる。

## 6. おわりに

本研究により、乳児がまだうたい出す前の幼い頃から、音楽の楽しさを全身で受け止め、音楽に反応し表現していることが分かった。そしてその動きは6つのカテゴリーに分類することができた。その動きの現れに一応の順序性は見られたものの、子どもひとりひとりの好きで得意な動きがあることも分かった。

また14ヶ月の乳児がすでに保育者のうたう歌のテンポにあわせて身体を揺らし同期していることも確認できた。音楽的な刺激に対する動きの表現は「リズムカルに動く」などの一言では片付けられない様々な動きがそれぞれの発達に即して観察できた。

まだことばを十分に獲得できていない乳児たちが好きな音楽や歌の刺激に対し、満面の笑みをたたえて全身を揺らしてその楽しさを表現している。これはまさに音楽の持つ根源的な力によるものであると言えよう。子どもの心の動きに与える音楽の影響力の大きさを、この小さな笑顔を見ていると強く感じる。

身体を左右に揺らしたり、膝を屈伸させて身体を上下することは音楽的な刺激のある場合だけとは限らない。なんとなく嬉しい時、楽しい時にも同様の動きをみせることは日常よく見かける。音楽がきっかけになっているときも、そうでないときも両方に共通することは、心が解放されていて身体に力が入らず、くつろいだ状態にあるということである。

本論で取り上げた乳児の動きは正高(2001)のいう「手足の運動は音声言語発声の基礎となるパターン習得の道具である。」のとは違い、純粋に乳児の喜びや楽し

さの表れであると考ええる。

現在「表現」という言葉が広く使われている。乳幼児にどう表現させるかという捉え方が一般的であるが、まず始めに彼らがどう表現しているかを見ていくことが重要であると筆者は考える。今まさに表現を捉え直す時期である。

もちろん子どもたちの表現はそれが単独で存在するのではなく、子どもが楽しそうにしている様子をみて楽しさを共有している保育者の存在が、不可欠であるのは自明のことである。竹内(2001)が言うように、「表現には、子どもが何をしても受け止められ、はげまされる場が必要である。表現が培われる土壌がいるのだ。子どもに必要なのは、ほめことばではなく見るものが本当に感動すること」なのである。

また音楽知覚の研究や実験を否定するものではないが、設定されたテストが出来るかどうかではなく、日常生活の中で、どれほど音楽が子どもたちの心を育てているかということを今後も見て行きたい。それが、より良い保育のあり方を探る道であると考えからである。

尚、本論は第55回日本保育学会において論文集(細田・小野 2002b)及び口頭にて発表したものに加筆したものである。

## <文献>

- (1) 細田淳子(2001)「ことばの獲得初期における音楽的表現—子どもがうたい始めるとき—」東京家政大学研究紀要第41集 pp.107~113
- (2) 細田淳子(2002a)「ことばの獲得初期における音楽的表現—身体で感じるリズム—」東京家政大学研究紀要第42集 pp.133~139
- (3) 花熊暁(1997)坂本龍生編著『入門 新・感覚統合の理論と実践』—第4章刺激を与える順序— p.85 学習研究社
- (4) 梅本堯夫(1999a)『子どもと音楽』pp.61~62 東京大学出版会
- (5) 梅本堯夫(1999b)同掲書(4) pp.70~72
- (6) 梅本堯夫(1999c)同掲書(4) p.38
- (7) 正高信男(2001)「子どもはことばをからだで覚える」p.77 中公新書1583
- (8) 竹内敏晴(2001)『思想する「からだ」』p.199 晶文社
- (9) 細田淳子・小野明美(2002b)「ことばの獲得初期における音楽的表現(5)—音楽刺激に対する身体表現—」第55回日本保育学会論文集 pp.23~34

### Summary

Infants swing or sway, reacting to music, sounds, their parents' songs and so on, before they begin to sing songs. My hypothesis is that infants' physical reaction to sounds around them is the first step to acquire an ability to sing: Listening to music and sounds and a desire to express joy and pleasure is surely a necessary condition for infants to start singing. I have considered this hypothesis in the present article, where six infants from remove a newborn to two years old were examined. Although they take out have reacted to music and sounds in different ways, there are factors common to their physical expressions as follows:

C-1: Up and down movement (bending and stretching)

C-2: Back and forth movement (front to back)

C-3: Side to side movement

C-4: Stamping

C-5: Twirling around

C-6: Other movement

Infants who can stand start C-1 first, performing C-2 and C-3 in order.